

国際協力特別賞

「地域から世界へ」

飛騨市立神岡中学校 2年
溝口 天

私は、この夏、4つのボランティア活動に参加した。「ジュニアリーダーとして子供キャンプのお手伝い」「老人ホーム納涼祭のお手伝い」「花火大会後の清掃活動」「高齢者への給食サービス」。どれもとても小さな活動なのだが、相手の方の喜んでくださった笑顔や「また来てね。」の言葉に、とても嬉しくて温かい気持ちになった。

私がボランティア活動に関心を持つようになったのは、父の影響だ。父は、様々な地域のイベントの手伝いや主催者として、多くの活動を行っている。建築業に従事しているので、特技を生かし、他地域の木工教室も引き受けて参加したことがある。その中でも、私が驚いたのは、東日本大震災の起きた直後、流木や土砂で身動きのできなくなった鮭を助けるために東北へ行ったことだ。当時私はまだ小学校1年生だったのでよく覚えてはいないが、その1年後に鮭の養殖場が再開できたという知らせが届いたときに、父がとても嬉しそうに「それは良かった。」とつぶやいた姿をよく覚えている。

それにしても、東北は遠い。何もこんなに離れた飛騨からボランティアに行かなくても、とは考えなかったのだろうか。父に聞くと、どんな気持ちで行ったのか、よく覚えていないと言う。「何で自分の気持ちを覚えていないんだよお〜。」と怒る私に、父は「多分ね、自分が行くことによって、何かが少しでも変わるんじゃないかなって、思ったんやさ。無我夢中だったよ。」と照れくさそうに言った。普段父と話すこともあまりない私だが、そのときの父は、かっこよかった。

そうなんだ!!東日本大震災の後、日本中から多くの方々が東北へかけつけた。それは、どんな単純な作業でも、できることをしたい。少しでも東北の方々を助けたい、という同じ「願い」から始まった行動だったのだと思う。

父の影響からか、私は小学2年生頃から、「将来、世界の困っている人たちを助けて、笑顔にする」という莫大な夢を持ち始めた。中学生になり、その夢はもっとはっきりし始めた。それを話すと、苦笑する友達もいる。しかし、私は父のように、「自分が世界のどこかへ行くことで、誰かの生活の何かが変わる」ことを信じているのだ。世界には、学校に通えず働いている子がいる。病気を予防する知識が乏しい地域がある。生活水に恵まれず井戸を求めている村がある。誰もこの問題を解決しようとしなければ何十年、何百年とずっと解決せず、苦しみ続ける人がいるだろう。でも、逆に言えば、誰かが解決しようと動けば暗かった未来が明るくなる。私はそう思う。だからこそ、今、学校で教わっている知識や技術をもっと身に付ける必要がある。もっと勉強をがんばって未来の自分につなげたい。私のモットーは「地域から世界へ」。今できる小さなボランティアを続けて、誰かを支える力をつけて、未来に必ずつなぐ。